

身代わりオメガは番候補の美形アルファの
一途な愛に囚われる

登場人物紹介

騎士爵の息子でオメガ。
幼い頃に両親をなくし、
従僕見習いとして辺境伯に引き取られた。
アスターからお見合いでの入れ替わりを提案される。

リリフラウ Ω

リドリー α

王都からやってきた婚約者候補のアルファ。
リリフラウと出会う瞬間に運命の番同士と悟り、
猛アプローチしてくる。ウインダムとは友人同士。

辺境伯後継でオメガ。
凄絶な美貌に反して気が強く、大胆。
リリフラウのことを
弟のように可愛がっている。

アスター

アスターの父でアルファ。
辺境伯領の現領主で
武芸の腕は一流だが、
妻と息子には頭が上らない。

ワグナ辺境伯

ワグナ辺境夫人

アスターの母でオメガ。結婚前は傾国の美姫と呼ばれ、
社交界を賑わせたほどの美貌の持ち主。

ウインダム

リドリーとともに王都からやってきた
婚約者候補のアルファ。
アスターを運命の番と悟り、アプローチをかける。

目次

身代わりオメガは番候補の美形アルファの
一途な愛に囚われる

7

番外編 光溢れるサロンにて

283

身代わりオメガは番候補の美形アルファの
一途な愛に囚われる

第一章 リリと若様、入れ替わる

「父上、今、なんとおっしゃいました？」

辺境伯繼嗣であるアスター様の寢室にいたときのことだ。僕が寝支度を手伝っていたところに、アスター様のお父上——旦那様が突然やってきて、とんでもない爆弾を落としたのだ。

アスター様が、切れ長の目をつり上げてお父上を睨みつけている。色白の頬が怒りのために赤く染まって、とても綺麗だ。アスター様は綺麗で優しいけれど、ちょっと変な人だ。

「いや、だから、お前とリリの婚姻が決まったのだと……」

「私はともかく、なぜリリの婚姻が決まったのです？」

リリ——つまり、僕の婚姻話を持ち込んだ旦那様は、息子に詰め寄られてタジタジと後退った。僕だって旦那様を問い詰めた。旦那様はアスター様と僕の婚姻とおっしゃったが、別に僕たちが結婚するわけじゃない。それぞれに縁談が持ち上がったと言っているのだ。

アスター様が「私はともかく」とおっしゃったのは、辺境伯繼嗣として次代に血を繋ぐ義務があると理解されているからだろう。

対して僕は、アスター様にお仕えできなくなるのなら、結婚なんてするつもりはない。辺境伯領

を治める手伝いをするので、受けた恩を返すつもりでいる。

もともと僕は、身寄りのない孤児だった。

ワグナ辺境伯家に仕えて十年。最初は同い年のアスター様の遊び相手として迎えられ、そのうちになんとか乳母の手伝いを始めて従者見習いになった。

アスター様は僕のことを弟のように可愛がってくださったし、旦那様もおそらく一般的な使用人の範疇を超えて教育を受けさせてくださった。ありがたくも畏れ多かつたけれど、どうやら旦那様には思惑があったようだ。

相次いで両親を失った幼い僕を辺境伯家が迎え入れてくれたのは、アスター様が旦那様におねだりしてくれたおかげでもある。

葬儀の後、近所の大人たちは身寄りのなくなった僕の処遇に困っていた。

僕たちが住むワグナ領は、南北に長いトルバート王国の北端にある。国の境界線を巡って対立しているヨルージャ王国に対する防衛の要だ。ヨルージャ王国は何年もの間、何度追ひ払っても懲りずに攻めてきている。

僕の父様は領地を持たない騎士爵で、辺境伯である旦那様に仕えて俸禄をもらっていたらしい。全部、後になって旦那様から聞いた話だけ。というのも、父様が亡くなったときの僕はほんの子どもで、爵位や領地という世の中の仕組みを理解していなかったのだ。

父様はヨルージャ王国との戦闘で亡くなった。弔問に訪れた旦那様がアスター様を伴っていたのは、偶然だった。

幼いアスター様は泣きもせずにはーっと突っ立っていた僕を抱きしめて、「よく頑張ったな」と背中をさすってくれたんだ。

僕はその一言で、張り詰めていた何かが崩壊した。わんわん泣いて、アスター様の高価な絹の服を涙と鼻水でびしょびしょにしてしまったことを覚えている。

名前を問われて僕が「リリフラウ」と答えると、「百合の花だな。私はアスター、星という意味だ」と自分の名前を教えてくれた。

そうしてアスター様は父君である辺境伯——旦那様に、僕を城砦に連れ帰りたいと頼み込んだ。それが十年前のことだ。僕の人生の最大の転機……だと思っていたんだけど、どうやら十年経ってもっと大きな転機がやってきたようだ。

僕への縁談という形で……

世の中には男女の性別のほかにアルファ、ベータ、オメガというバース性がある。

人口の八割以上がベータと呼ばれる人々で、彼らはバース性に左右されず、男女間で子どもを授かる。生まれる子どももベータだ。ベータ同士の夫婦からアルファやオメガが生まれることもあるが、本当に稀である。

アルファは頭脳も肉体もベータの何倍も優れ、国の中枢で要職に就く者が多い。貴族階級に多いのが特徴だ。

「国の成り立ちの頃に活躍した人々に爵位を与えたら、自然とそうなったんだろう。使える人間が

アルファばかりだったということだ」

そう言ったのはアスター様。綺麗な顔で辛辣だ。

そして最後は、オメガだ。男女関係なくアルファの子を孕むことができる性で、女のオメガは同じ女性のオメガ以外が相手なら、妊娠が可能だ。

男のオメガは、相手がアルファであることが妊娠の条件だ。女性のアルファと男性のオメガの夫婦の場合は、男のオメガが産む側になることのほうが多い。

また、オメガは圧倒的に生きにくい存在でもある。

オメガは成熟すると三ヶ月に一度、発情期に入る。この発情期が生きにくい原因だ。個人差はあるが、期間は七日程度続き、その間は自力で食事をすることも困難なので、発情期明けは衰弱していることが多い。寝台から起き上がれないのが普通で、療養期間も加えると正味十日間は寝込むことになる。

三ヶ月に一度、十日間も引きこもるオメガ。どうしたって世の中のお荷物みたいだが、そんなことはない。むしろ、大切に保護される存在だ。

理由は簡単。優秀なアルファの母親は、ほとんどがオメガだから。

オメガを得たアルファは能力が上がると言われている。

アルファがオメガを得ることを『番になる』『番婚』と言う。アルファの本能は番のオメガを守り養うことに全振りしている。彼らは大事な番を飢えさせないために、必死に働くのだ。だから、番を得たアルファは無敵だと言われる。

オメガが貴族家の当主になった例はない。しかし、天才的な剣の技量と冷静な判断力を持つアスター様は、オメガであるという一点を除けば理想的な後継だ。

「父上、私の婿は最低限剣を振り回せれば、どんな阿呆あほうでも構いません。辺境伯領、ひいては我が偉大なるトルバート王国の国境を守るのは、この私です」

辺境伯家は典型的なアルファ貴族の家系だった。記録にある限り、直系の子女にアルファ以外のバース性が現れたのは、現在の辺境伯夫人が初めてである。

ひとり息子のアスター様も、例に漏れず文武共に優れている。僕と出会った齡よわい八つにして、身長よりも長い刀を自在に操る様は、隣国ヨルージャから国境を守る辺境伯家の跡取りに相応ふさわしいものだった。オメガ判定を受けても、その評価は変わらない。

お父上に毅然きぜんとした態度を取るアスター様の横顔は、凛々りりしくも美しい。

「でも、リリの婿は並のアルファでは許しませんよ。だいたいワグナの領民はベータだろうとオメガだろうと、男女共に武芸を嗜たしなんでいるのです。腰抜けに用はありません」

ワグナ辺境伯領は辺境の地であって、何度も隣国ヨルージャと衝突している。そのため領民は、子どもの頃に一通りの武芸を仕込まれるんだ。もちろん向き不向きがあるので、継続するかは各々の判断になるんだけど。

小柄な僕は手足が短いので、剣は早々に諦めた。相手に切っ先が届かないので、いざ戦闘となったら真っ先に狙われるだろう。代わりに槍術そうじゆを教わったらしつくりきたので、本格的に取り組ん

いる。

神童の誉れ高いアスター様が、傍に置きたがったのが僕だった。

旦那様は将来アルファとして辺境伯家を継ぐアスター様が、早々に運命の番を見つけたと勘違いして、将来の辺境伯夫人——つまり僕のために、立派な槍の装備を揃えてくださった。

なんだか申し訳ないが、アスター様がオメガとわかった後もありがたく頂戴したままだ。いざというときには、それを持って戦うことになる。

とはいえ、せいぜい自分を逃すくらいしかできないだろう。城砦の奥深くにいる従者が武器を手にするときなんて、きつと辺境伯領のみならずトルバート王国全体の危機だろうから。

「私も十二歳の誕生日にオメガだとわかりましたが、鬱屈うつくつすることなどありませんでしたよ」

アスター様からお父上への舌鋒ぜっぽうは止まらない。

確かに、アスター様はオメガと診断が下されてからも、腐ったりなんかしなかった。神童と言われた幼い日のままに鍛錬を続け、足りない腕力を技術で補うよう精進した。それはもう、雷いかづちのごとき激しさで。

「我が息子よ。それは私も誇りに思っている。親の身勝手でアスターをアルファだと決めつけていたゆえ、オメガ判定は青天の霹靂へきれきだったか……」

旦那様は少し申し訳なさそうにしている。アスター様がオメガやベータだという可能性を微塵みじんも考えていなかったんだろう。

さて僕は、旦那様の予想通りオメガだった。幼いうちに僕がオメガだと確信を持たれたのは、ア

スター様がアルファだと見なされていたからだ。

僕たちは幼い頃は同じ寝台で眠り、共に食事をし、本当に兄弟のように過ごさせてもらった。旦那様にはそれが、アルファの独占欲に見えていたらしい。

しかしいざバース検査を終えてみれば、僕だけでなくアスター様もオメガで……オメガ同士ではどうにもならない。心の交流はできるだろうが、跡取りを儲けることはできない。

といつても、もともと僕とアスター様の間にあるのは信頼と友情の絆だ。僕の立場は曖昧になったが、アスター様は変わらず兄弟のように大事にしてくれたし、奥様も可愛がつてくれた。

旦那様はせっかく育てたオメガを有効活用することにしたのだろう。僕はそのままワグナ辺境伯家に置いてもらえることになった。オメガは大抵貴族の妻に納まり、四対一の割合でアルファとオメガの子を産む。僕のようにベータ夫妻から生まれるオメガは珍しい。

「リリは見たままのオメガだったのだからなあ」

旦那様がしみじみとおっしゃる。脳裏に、六年前のバース判定の日を思い浮かべているのだろうか。

つられて僕も思い出す。驚きすぎて腰を抜かさんばかりだった旦那様の姿を――

「そういえば父上、動揺しすぎて母上に尻を蹴飛ばされていましたね。あれほど驚かずともよかったのに。自分で言うのもなんですが、当時から私は母上にそっくりでしたよ」

アスター様、そんなふうに追い打ちをかけなくてもいいじゃないですか。僕は遠慮して口には出しませんでしたよ。なんて考えながら、込み上げる笑いを我慢した。

でも、アスター様の言う通りだ。アスター様のゴージャスな金髪と憂いを帯びた紫水晶の瞳、白皙の美貌は傾国の美姫と呼ばれた奥様にそっくりなもの。麗しい花の顔容や、苛烈な性格にもお父上の要素は見当たらない。

同い年の僕とアスター様は、今年十八歳を迎えた。本格的な発情期は迎えていないが、この一年、なんとなく気怠い日が続くことがあった。だいたい三ヶ月に一度だ。

それはアスター様も同様で、旦那様はいよいよワグナ辺境伯家の跡取りのことを考えなくてはならなくなったのだろう。

「リリの相手は、一体どこの誰なのですか？」

しばし思案に耽っていたが、アスター様の声で我に返る。

奥様にそっくりなご子息の刺々しい口調に、旦那様はデレデレと相好を崩された。旦那様は高潔なアルファだが、ご自身の番であるオメガの奥様にベタ惚れた。アスター様がオメガ判定されたときは大層驚いておられたが、その後過保護になりすぎて奥様に叱られていたのを僕は知っている。

それにしても、アスター様ってば、ご自分の相手のことは本当にどうでもよさそうだ。僕を心配してくれるのは嬉しい反面、とても心配だ。僕だってアスター様のお相手が気になる。馬鹿で阿呆な乱暴者だったらどうするの？

「旦那様。僕のことより、アスター様です」

思わず親子の会話に口を挟む。使用人の立場で許されることではないが、曖昧な立場の僕にはそ

れが可能だ。けれど旦那様が答えをくださる前に、アスター様が振り返って僕を抱きしめる。

「リリ、私の可愛い弟。お前が不幸になったら、私は悔やんでも悔やみきれない」

額にチュッと小鳥の口付けが落とされる。アスター様は僕に対して、始終こんなだ。だから旦那様が勘違いしたんだよ。

「アスター。オメガ同士で間違いないだろうが、距離が近すぎやしないか？」

旦那様の凜々しい眉毛が下がる。オメガ同士でどうこうよりも、主従関係ではないと僕も思う。けれど、逃げようとするアスター様が悲しい表情をなさるし、奥様も侍女頭も何も言わなかったのもこのまま育ってしまった。

アスター様にとつての僕は、いつまでも身寄りをなくした可哀想な子どもなのかもしれない……同い年だけど。

「母上だって、こんなものです」

そうなんだ。アスター様と同じ顔貌の奥様も、畏れ多くも僕を抱きしめて「わたくしの息子」と呼んでくださる。明らかにお気に入り使用人に対する態度を超えている。

以前、それとなく理由を尋ねたことがあるが、「可愛いからいいのよ」と返されて困惑した。

「で、父上」

アスター様が、ぞんざいに父君を呼ぶ。

「リリの相手は誰なんです？ ついでに、私の婿とやらの名前も聞きましょうか」

ついでじゃダメですと思ったが、口に出すのは控える。僕が何か言うと思脱線しそうだもの。

「うおっほん」

わざとらしく咳払いをして、旦那様は眉間に皺を刻み、目を閉じた。

「偉大なるトルバート国王の第四王子殿下が、婿として来てくださる」

「リリの相手が王子殿下？」

そんなまさか。今度こそ突っ込みかけたが、すぐに旦那様が否定した。

「お前の相手に決まっているだろう」

「会ったことはありませんが、向こうからの申し出ですか？」

血色のいい唇に白い指を這わせて、アスター様は思案顔で尋ねた。

貴族の妻子はシーズンになると王都に出向いて社交に勤しむのだが、オメガの場合それをしないで領地に籠もる者も多い。

野心家のオメガは積極的に夜会に参加して相手を探すらしいが、アスター様は鍛錬を理由に領地を出なかった。建前上は、未婚のオメガなので自衛のためと言っていたけれども。

旦那様は番である奥様を人目に晒したくないので、これ幸いとはばかりに妻と息子を領地に置いていった。そんなわけで王子殿下に会ったことがあるのは旦那様だけだ。

それにしあって、王子殿下だなんて。辺境伯は高位貴族である侯爵と同等の位にあると習った。つまり、王子殿下のお相手として、辺境伯家の子息は不足がない。

むしろこの婚姻は、国境の守護として辺境伯家が王家の信頼を得ている証だろう。僕だったら白目を剥いてぶっ倒れていたかもしれないけど。

旦那様はアスター様の問いかけに頷いてから、僕に視線を移す。そして、重々しく告げた。「リリはファイエル侯爵家への嫁入りが決まった」

「——今、なんとおっしゃいました？」
聞き間違いだろう。そうに違いない。

ありえない！

一瞬で頭に血が上る。意識が途切れそうになるのを無理やり繋ぎ止めて踏ん張った。そんな僕を支えようとしたのか旦那様は身を乗り出したが、伸ばした手をアスター様にぺちりと叩かれた。

「未婚のオメガに触れないでください。番以外のアルファの変な匂いがついたらどうします」

アスター様の旦那様に対する態度は厳しい。この場合の匂いは、悪臭という意味ではない。アルファは自分の番にフェロモンの匂いを纏わせることで、ほかのアルファを牽制するのだ。そして、自分のオメガに他者の匂いがつくことを嫌う。決して、旦那様の鍛錬後の汗の臭いを指摘したんじゃない……と思う。

愛息子に「変な匂い」と言われた旦那様は、大袈裟に一步下がって情けない声で言った。

「リリは息子も同然ではないか」

「それでもダメです」

オメガは過剰なくらい強く警戒心を持ったほうがいい。僕たちは奥様と侍女頭にそう教育されている。特に僕はバース検査前から「オメガの心得」なるものを教えられて育ったので、その考えが身についている。

しかし、「オメガの心得」と僕の嫁入りは別問題だ。ワグナ辺境伯家に拾われてからの十年の月日が、走馬灯のように脳裏を駆け抜けた。アスター様の絹の服を、涙と鼻水でぐちゃぐちゃにしたこの僕が、侯爵家へ嫁するだつて？

アスター様はお父上をあしらって、僕の肩に手を回した。一般的なオメガよりも長身のアスター様は、小柄な僕を難なく支えることができる。オメガだなんだと言っても、男であるのは間違いない。

「ファイエル侯爵家に嫁入り？ 領地から出たことのないリリが、いきなり侯爵家？」

「アスター様、気にするのはそこじゃありませんッ」

僕の声が上擦っているのには目をつぶってほしい。

「確かに、僕は領地から出たことがないですけど、それはアスター様だつて同じじゃないですか。そうではなくて、侯爵家という高位貴族に、平民すれすれの騎士爵の息子がお嫁に行くことが問題なんです」

「あちらがアルファでお前がオメガなら、なんの問題もない」

言われてみれば、バース性の前で爵位なんて意味がない。

番になったアルファとオメガは、お互い以外を受け入れないからだ。家格が合わずとも、高位貴族の養子になれば済む。むしろベータの両親のもとに生まれたオメガは、保護と教育を兼ねて後見人を探すのが常識でもある。

うまく反論する材料が見つからず、ぐっと奥歯に力を入れる。辺境伯であるアスター様の父君に

反論するのは不敬だが、僕の一生がかかっている話だ。

「侯爵家にお嫁入りなど、僕には荷が重すぎます」

「それもそうだが、明日にはいらっしやることだし、会うだけ会ってみなさい」

確かに、高位貴族である侯爵家の方がわざわざ辺境までおいでになるのに、下級貴族の僕から断ることなんてできるわけがない。「会うだけ」で済ませるか、侯爵家側が判断することだ。それとも、同等の爵位である旦那様が断ってくれるのだろうか。

会うだけと言われても怖い。僕にできることといったら、槍を振り回すくらいだ。ワグナ領から出るなんて、これっぽっちも考えたことなかったよ。

一度にいろんなことを考えたせいで、頭の中が飽和している。何か反論したいが、ちつとも言葉が出てこない。

「明日の朝、侍女頭を寄越す。失礼のないよう支度しなさい」

旦那様はそう言っきびすて踵を返す。

その背中に、アスター様の冷たい声突き刺さった。

「父上……明日とおっしゃいました？」

そういえばそんなことを言っていたような？ そうだ、動揺しすぎてちゃんと聞いていなかったけど、旦那様は確かに「明日」とおっしゃった。

「私たちが逃げ出せぬよう、ギリギリまで隠しておられましたね？」

王家や侯爵家からの申し込みが、昨日今日なわけがない。アスター様がおっしゃる通り、旦那様

はわざと黙っていたのだろう。

「いや、だってお前……」

「だって、などと奥歯に物が挟まったような物言いをなさらないでください。言い訳は結構です。私たちは明日に備えて就寝します。父上は、すみやかに母上のところへどうぞ」

地の底を這うような迫力ある声で、アスター様はお父上を追ひ払った。

旦那様はアルファの中のアルファだが、溺愛する奥様にそっくりなアスター様には弱い。逞しい背中が心なしに萎しなびている。

そんな後ろ姿を見送ると、アスター様は僕をベッドに誘った。

ふたり並んで縁に腰掛ける。僕は従僕というより兄弟みたいな扱いなので、おしゃべりしたままベッドで寝落ちしても誰も怒らない。よくないのはわかっているんだけど、アスター様が「おいで」と言ってくれると、ついふらふらと……

「リリ、お前はこの話をどう思う？」

どうも何も、ワグナ辺境伯家に拾っていた平民すれすれの下級貴族——それも身寄りもなく途方に暮れていた僕が、旦那様が持ち込んだ縁談を断れるはずもない。せいぜい荷が重すぎると主張することしかできない。

どうにかして、ファイエル侯爵家のほうから断ってくれないだろうか？

「アスター様の番になるために教養を授けられたとはいえ、僕は辺境での振る舞いしかわかりません。王都のお屋敷で社交なんて、絶対に無理です。侯爵家ってことは、お城に行くこともあるんで

しょうか？」

目の前が真っ暗になって、また意識が遠のいた。

ダメだ、ダメだ！ 僕はこれでも辺境の男だ。こんなことでいちいち眩暈をを起こしているようじゃ、アスター様のお役には立てない。

不安を振り払おうと頭を振る。アスター様は僕を宥めるように背中をポンポンと叩いてくれる。

「私も、社交界に出る前にオメガだと判明したから、王家主催の夜会にも舞踏会にも出席したことがない」

アスター様は、着飾ってうふふと微笑むよりも、愛刀を振り回して訓練がてら害獣を狩るほうが性に合っていると続ける。

本人はそう言うが、アスター様が装った姿は美しいんだ。ぼんやりした緑の瞳と平凡な栗色の髪と僕と比べたら、白鳥と家鴨^{あひる}ほども違う。

「そんなわけで、私は王都で面が割れていない」

アスター様が僕の不安を吹き飛ばすように、満面の笑みを浮かべている。美しいけれどお言葉がどこことなく不穏だ。嫌な予感しかない。

「私は第四王子殿下の為人^{ひとなり}を、第三者の立場でとくと観察したい。そして、可愛いリリの婚姻相手^{ごうこんさうし}が、どれほどの人格者か直に試したい」

アスター様は真剣だ。紫水晶のような瞳が洋燈^{あか}の灯りを受けて、橙色にきらめいた。けれど、言っていることはめちゃくちゃだ！

「私はリリの従者となろう。お前は明日から、辺境伯継嗣だ」

入れ替わって従者の立場で観察する気ですか!? 無理に決まってるでしょう!!

「アスター様、あそこにある素晴らしく美しい鏡台で、いったい何を見ていたんです？ 僕のありがちな栗色の髪とか、面白みのない緑の瞳とか、チンチクリンな身長とか、あなたの美貌の前では子どもの落書きです！」

悲鳴のように叫んだ言葉は僕の本心だ。

それなのに、アスター様はいつそう美しく微笑んで、僕の機嫌をとるように肩を抱く。

「何を言う？ その甘そうな栗色の髪は艶^{つや}めいて美しいし、緑柱石^{りよくちゆうせき}の瞳はいつだって潤^{うる}んでいて庇護^{ひご}欲をそそる。小柄な身体だって、こうやって腕の中にすっぽり収まって可愛らしい」

アスター様の視力は、僕を見るとき限定で低下するのかもしれない。

「……褒めていただいて嬉しいのですが、アスター様は奥様にそっくりです。すぐにバレちゃいますよ」

「ふん、王子殿下の滞在中、父上は母上を隠すおつもりだろう。婿入りしたのならともかく、まだ婚約すら整っていない状態だ。番のいないアルファに母上の姿を見せるわけがない」

確かに……アルファの本能とはそういうものだと思った。特に、力の強い上位アルファは番を大事に囲うって話だし。

「それに、リリは類稀^{たぐいまれ}なる長槍の使い手だろう。長物は館の中では使い勝手が悪いが、リリは狭い場所でも巧みに使う。辺境の男として、頼もしい限りだ」

僕が槍を選んだのは、腕の短さを補うためだ。

未来の辺境伯夫人として最後の砦^{とりで}になるために、得意な武器をひとつ履修しておく必要があったのは、アスター様も知っているはずだ。もつとも、ふたりともオメガだったから、僕が辺境伯夫人になることはないけれど。

「無理ですよ。持って生まれた気品とか……」

「社交界に出ない私は、深窓の令息として有名ならしい。それに、オメガらしからぬ高身長だ。可愛いリリのほうが、よっぽど深窓の令息に見えるぞ。黙って微笑んでおけばよいのだ」

アスター様はなんでもないことのように言うが、そんなに簡単にいくのだろうか？ 第一、旦那様がなんとおっしゃるか……

「まあ、王子殿下が従者に尊大な態度を取るような男なら、なんとしても破談にするがな」

「待ってください、アスター様！ それ、僕が侯爵家との縁談を断るより難しいんじゃない？ 四番目とはいえ、王子様ですよ!？」

びっくりし通しの僕の口から、ひっくり返った声飛び出した。

「大丈夫、いつも通りふたり並んで歩いていればいいだけだ。簡単だろう？」

何が大丈夫で、簡単なんだろう。

アスター様は天から二物も三物も与えられているのだが、その弊害か、斜め上に向かって全速力で駆け抜けていくところがある。工程をすっ飛ばして、最終目的地に真っ直ぐ向かっていくんだけど、追いかける僕はたまったもんじゃない。

「明日は朝からリリを飾らねばなるまいな。そうと決まれば、さっさと寝よう」

そう言うと、アスター様は大きなベッドに上がり、僕を抱いたまま毛布に潜り込んだ。あつという間に寝息が聞こえてくる。辺境の男たるもの、いつでもどこでも眠れなければならない……って、ここは戦場じゃないですよ、アスター様！

アスター様が面白い言動をするのは通常運転だから、僕も慣れたものだ。この方が神童だったのは間違いない。今でも才色兼備な麗人だ。ただ、真面目すぎて突飛なことをしでかすだけで。



一夜明けて、僕はアスター様のベッドでいつもの時間に目覚めた。

降って湧いた大それた縁談など気にしても仕方がないとばかりに、爽やかな朝だった。自分の図太さがちよつとばかり恥ずかしい。物語に出てくるオメガなら、緊張しすぎて夜も眠れなかったはずだ。

「なんだ、これは……夜、眠る前にはなかったぞ」

衣装部屋に入ったアスター様が大声を上げた。

アスター様はそう言うものの、僕は明け方に衣装部屋から女中の気配がしたのに気づいていた。一応武芸を嗜んでいる身だ。気づかないようでは、国境を守ることなんてできない。

アスター様が「なんだこれは」と言ったのは、ふたり分の衣装箱が天井まで積み上がっていたか

らだ。

箱の中に入っていたのは、上品で少し大人っぽい衣装だった。数が多かったのは、皺がつかないように一点ずつ丁寧に収められていたからだ。

箱にはそれぞれ百合の花ときらめく星の印が付けられており、どの衣装が僕のものかはすぐにはわかった。

寸法はびつたりだけど、フリルとレースがたつぷりで気恥ずかしい。こんなにヒラヒラした服、着たことがない。

きつと高価な衣装なのだろう。素晴らしく手の込んだ縫製が施されている。

衣装を見て、王家とアスター様、侯爵家と僕の縁談が、随分前から進められていたものだと感じた。だって、こんなに丁寧な美しい刺繍なのだ、腕の確かな職人の手技と時間を詰め込んだものに違いない。

こんなに素敵な衣装が用意された見合いなんて、断れる気がしない。

貴族の当主夫妻はアルファとオメガの番が多い。アルファよりも絶対的に数が少ないオメガは、引く手数多なんだそうだ。

貴族間で少ないオメガが嫁された結果、ほとんどの貴族が親戚になった。血が濃くなりすぎて断絶の危機に陥っている家もあるとか。

平民すれすれの騎士爵家生まれの僕が侯爵家と縁付くなんて、とんでもないと思っていたけれど、貴族の血脈から遠いということは、血を薄めるのにちょうどいいのかもしれない。

アスター様の番候補じゃなくなった僕は、ひどく曖昧な立場の居候でしかない。従者の真似ごとではしているけれど、賃金をもらって働いているわけじゃないから、行儀見習いというのが近いと思う。

「父上は、一度締めさせたほうがよいな。私がオメガだとわかった瞬間に、可愛いリリの嫁ぎ先を吟味したらしいから。リリは道具じゃない」

アスター様は自分で身支度をしながら、ブツブツと言っている。今日のために用意された衣装は箱のまま衣装棚に放り込み、式典用の隊服を着込んでいた。辺境伯領では、冬眠明けの獣を駆除するための討伐隊が組まれているのだが、その隊服だ。

「アスター様、旦那様がご用意なさった衣装は着なくてもいいんですか？ かえってお相手の興味を惹きそうな出立ちなんですけど……」

豪華な金髪を首の後ろで一括りにした姿は、細い腰が強調されて美しい。血なまぐさいことには無縁そうな麗人が、腰に珍しい剣を下げている。かつて蛮族の侵入を阻み、命を落としたという聖者の絵を思わせる、静謐な美しさだ。

「正装だからよいのだ。むしろ、正しい姿だろうか？」

「お腰の愛刀は、流石にダメだと思えます。王族にお会いするんですよ」

アスター様の得物は刀という片刃の剣で、特別に誂えられたものだ。

「辺境は危険な場所だと、教えてさしあげねばなるまい」

そう言ってふふと楽しみに笑うアスター様は、美しさとちゃめっ気がブレンドされていてとて

も可愛らしい。

僕だって知らない人に会うのは憂鬱ゆううつなので何か持ちたいけれど、長槍はまず無理だ。ため息を抑え込むと、襟元えりのリボンを結んで着替えを完成させた。

「そりゃ春先は危険極まりないですけど」

獣——主に熊は、冬の巣籠もり中に出産して数を増やす。おまけに雌は秋に蓄えた脂肪を出産と授乳で使い果たし、飢餓状態で巣穴から出てくるのだ。

雪解けの頃、僕ら辺境の住民はそんな気性の荒い野生動物と、北から攻めてくるヨルージャ王国の両方を討伐しなくちゃならない。

ヨルージャ王国の人々は、もともとは定住地を持たず、天幕を携えて移動していたという。百年ちよつと前に、大きな部族が他の部族を吸収して王国を開いたのだ。この辺りでは、土地も人間も勝者のものになるのが常なので、彼らは新しい土地を求めて国境を越えてトルバート王国にやってくるのだ。

毎年春になると、ヨルージャ王国からやってくる侵略者と戦わねばならない、というわけだ。嫌な春の風物詩だ。……殺伐としている。

「とにかく、お腰のものは置いていきますよ」

僕は繰り返した。いくらアスター様といえども、流石に王子殿下に斬りかかることはないと思うけど、差しているだけで叛意はんいありと見なされたら大変だ。

「ふむ、仕方ない。リリがそんなに言うのなら諦めよう」

「僕が言わなくても、旦那様に止められますよ」

アスター様は不満そうだったが、ちゃんと刀を外してマントルピースの上の刀掛けに置いた。辺境伯子息の持ち物だけあつて鞆たもとの装飾も美しく、鑑賞に値する拵こしらえだ。

僕の槍も旦那様が詠よめえてくださった特注品で、今は自室に置いてある。

身支度を終えて、アスター様がソファーに腰を下ろしたタイミングで、侍女頭が顔を覗かせた。

僕らの支度が終わっているのを見て、ちよつと驚いた表情かおをしている。そういえば旦那様が昨夜、支度の手伝いに侍女頭を寄越すつて言っていた。すっかり忘れていた。

辺境ではいつ何が起るかわからないので、旦那様もアスター様も普段は身の回りのことは自分でなさる。今日は王子殿下をお迎えするための正装だから、侍女頭に手伝ってもらえということだったんだろう。しかしアスター様は、慣れた隊服をさっさとお召しになってしまった。

侍女頭が頭を下げて引つ込むと、ほどなくして旦那様が現れた。昨夜ぶりの辺境伯はこちらも立派なお召し物だ。

それにしても、旦那様ご自分でお迎えにいらっしゃるなんて……貴族家の当主が使用人の真似ごとをするなんて、僕らが逃げ出さないかよほど心配だったんだろう。

僕は旦那様に朝の挨拶をして、アスター様の後ろに控える。鷹揚おうように頷いた旦那様には、昨夜愛息に追い出された寂しげな様子はない。

「アスター、部屋に届けた衣装はどうした？」

アスター様は一分の隙もない素晴らしく美しい着こなしだ。すらりとした華奢な肢体に纏った、

討伐隊の式典用正装の白さが目にまぶしい。

「そこにありますよ」

「それは見ればわかる。なぜ箱のまま放つてあるのかと聞いているのだ」
積み上がった衣装箱は、蓋を開けて三秒後には閉じられた。僕の衣装がこれほど手が込んでいるのだ。アスター様のお衣装もさぞかし美しいのだろう。

けれど、アスター様は興味なさげに言った。

「着る気がないからです」

「それが通ると思っておるのか、馬鹿者！」

「討伐隊の第一礼装です。隊員はこれで結婚式にだって出るじゃないですか」

ああ言えばこう言う。アスター様と旦那様は今日も仲良く喧嘩なさっている。

いつもなら奥様が止めてくださるんだが、未婚アルファの来客があるときは姿を隠してしまわれるのだ。これは高貴なオメガにはよくあることだ。独占欲の強い番が警戒するからだそう。

「私の見合いだけなら着ましたよ。リリに無理強いするのが許せないので、抗議の一環です」

そう言うのと、アスター様がふっと吐息を漏らすように微笑んだ。うわっ、今の奥様にそっくり！

旦那様も気圧されて一歩後退っている。きつと、アスター様の向こうに奥様を見ておられるんだろう。高位アルファほど番に弱いと聞く。微笑ましいのか、情けないのかよくわからない。

僕は失礼なことを考えながら親子喧嘩を見ていることしかできなかった。原因は僕らしいのだが、止めようがない。

着替える、着替えないで大騒ぎをしているうちに、王子殿下との約束の時間が来てしまったようだ。家令から指示されて呼び出しに来た従僕が、アスター様の私室に旦那様がいるのを見て驚いた。当主は誰かを呼びつけることはあっても、自ら出向くことはないからさもありなん。

従僕の先導のもと、アスター様と僕は貴賓室に向かう。城砦で一番いい応接間だ。

旦那様は城門に向かった。王子殿下と侯爵家の方はそちらで旅の汚れを落としているらしい。旦那様が出迎えて、案内してくるだろう。

「侯爵家って言うっていたけど、どんな方なんだろう」

僕はアスター様の後ろを歩きながら、独りごつ。

旦那様は、ファイエル侯爵家とおっしゃったが、平民すれすれの僕が嫁いでも支障がない親戚筋の方なんじゃないのかなあ？

「第四王子殿下とファイエル侯爵継嗣は、親友同士という噂だ。私がそちらも見極めてやる」

侯爵継嗣？ 親戚筋の方とか、次男より下の弟君じゃないの？ それって、ゆくゆくは侯爵になるお方ということ？

「ア、アスター様！ 無理です、いけません！ あちらから断ってくるよう、ぜひとも仕向けてください！」

幼馴染みの親しさもあって、子どもの頃みたいにアスター様の腕に取り組む。従僕なんだから弁えろとかは、一旦傍に置いておく。

侯爵家というだけで僕にとっては無理難題なのに、更に継嗣だなんて絶対に無理だ！

「うむ、任せておけ。だが、リリが幸せになれそうなき男であつたら、躊躇うことはないのだぞ」

「あちらがよい男であつても、こちらが平民すれななんです！」
「何を言う。リリは可愛くて優しくて教養あるオメガで、長槍の腕は領内一という素晴らしい辺境の男だ」

アスター様、幼い頃から兄弟みたいに育ったからって、鼠眉目がすぎます！

だいたいこの国では剣が主流の武器で、僕みたいに長槍を得物にしている人なんて、ほんの一握りしかない。武芸人口が少なすぎる中での一番だなんて！

「それよりもリリ。これから私のことは、アスターと呼び捨てにしなければならぬよ」
「え!？」

「名前まで入れ替えると面倒だ」

「それはそうですけど……」

緊張しすぎてボロを出す気しかない。

「さあ、リリ様。落ち着いて」

額にチュッとおまじないのようなキスをされる。「リリ様」なんて、畏れ多い！

落ち着かずに部屋の中をうろろしているとき家令が合図を寄越したので、慌ててアスター様と並んで頭を下げた。右手は軽く拳を握って胸に当て、左手は背中に回す。

少しして音もなく扉が開き、旦那様がふたりの貴公子を中にお通しした。お迎えしたのが王子殿

下じやなかったら、案内の役目は家令だったのだろう。

頭を下げた僕の視界に入るのは、膝から下だけだ。ブーツはピカピカに磨かれている。

爽やかな柑橘の香り……香水でもつけているのだろうか。

「我が家の息子たちでございます」

旦那様が朗々と云った——ちよつと待って、「息子たち」だつて？ それって、息子ともうひとりって意味だよな？ 嫌な予感しかない。

「王都の若者の間で、辺境伯家の兄弟はさぞかし美しいのだろうと、噂になっている」

若い男の声がして、アスター様が一瞬、ぴくりと身体を揺らした。けれど、僕はその男が云った言葉に気を取られていた。

兄弟？ 僕のことだよな？ 噂って、何？ 頭の中が疑問でいっぱいになった。

考えてみれば、もし僕がアスター様の妻になるのだとしても、どこかの貴族の養子にならなきゃならなかっただろう。僕は平民すれなのだから。

きっと、旦那様は僕を侯爵家に嫁がせるにあたり、よそ様に頼むよりも、手っ取り早くご自分の養子にしたのに違いない。

酷いなんて言わない。後ろ盾のないオメガは悲惨な目に遭うことが多いので、庇護は必要だもの。侯爵家と辺境伯家なら釣り合いが取れる。打算もあるだろうが、旦那様は僕にも甘い。侯爵家で僕が侮られないように、という親心なんだと思う。

とはいえ、知らないうちに処遇が決められているのは嫌だ。後でアスター様に旦那様を問い詰め

てもらおう。直接だとちよつと畏れ多いから、虎の威を借るのは許してほしい。

いい加減頭を下げているのも辛くなってきた頃、さつきとは別の男性が口を開いた。

「顔を上げてくれ」

少し掠れた深い声。その声を合図にしたように、ドクンと心臓が跳ねた。

「ん……」

噛み殺しきれなかった声が、食いしばった歯の隙間から漏れてしまう。

息が苦しくなつて、僕はゆつくりと顔を上げる。いきなり養子がどうのという話になつて混乱しているけれど、挨拶はしなくちゃならない。

心臓の音がうるさいけれど、普段のアスター様を思い出しながら、正面に立つ男性と目を合わせる。

すごい真つ青な瞳だ。キラキラしているし、矢車菊の青——コーンフラワーブルーは、最上級の青色だ。

そう思ったのが先か、息を詰めたのが先か。真つ青な瞳が、わずかに見開かれた。ぶわりと甘酸っぱい香りが広がる。爽やかな柑橘の香りだ。

汗が吹き出す。息が苦しい。背筋に怖気が走り、胸を締め付けるような痛みと共に、腹の奥がきゅつと絞られる。

「あ」

僕の口からは、たった一音だけが飛び出した。膝から力が抜けて、床にうずくまる。

「緊急事態だ、殿下と継嗣殿を部屋にご案内せよ！」

旦那様が叫んでいる。なぜかその声を耳障りに感じる。臭いも邪魔だ。

どうして僕は、旦那様に嫌悪感を抱いているんだろう？　旦那様がアルファだなんて、拾つていただいたときから知っている。臭いを気にしたことだつてなかった。

それなのに、今は優しい八朔の香りに混じる、ジンジャーの臭いが邪魔で仕方ない。八朔の香りだけに包まれていたいんだ……

そう思ったら、ますます腹の奥がきゅうんとした。水を求める仔犬みたいに、短くて荒い吐息が口からこぼれる。喉が渴いて苦しい。

「た……けて」

助けて、と言いたかったのに。舌がもつれて、明瞭な言葉を紡げない。

もどかしい気持ちのまま闇雲に伸ばした指に絡んだのは、節くれだった力強い手だった。八朔の甘い匂いが、より濃密になる。ぶわりと風が生まれた音が聞こえた……ような気がした。

「僕の……」

この人は僕のもの。違う、僕がこの人のものだ。お願い、僕を選んでと衝動が突き上げる。

何これ……怖い、自分が自分じゃないみたい。得体の知れない恐怖から逃げ出たくて、絡んだ指を解こうとしたのに、それは許されなかった。

「俺のだ……」

コーンフラワーの青い瞳が、すぐそこにある。熱を帯びた声は掠れていた。短く刈り込んだ黒髪

が精悍な頬に落ち掛かり、獐猛な獣のように僕を見ている。
全てを委ねてしまいたい。

そう思つて目を閉じる。そこでブツンと意識は途切れた。

第二章 深窓の令息……とは？

信じられない。人間つて、こんなに簡単に失神できるんだ。

目覚めた僕は、アスター様の寝台の上で途方に暮れた。部屋の主人は、僕の隣で寝息を立てている。

窓から差し込む太陽の光が眩しいので、まだ午前中のようなのだ。とは言え、いつも早朝から鍛錬に励むアスター様が、こんな中途半端な時間に眠っているなんておかしい。

おかしいといえば、僕の身体だ。倦怠感がすごい。発情期の兆候が見え始めた頃、こんな感じだったような……。まだちゃんとした発情期は経験していないので、体感としてはよくわからない。初めて会うアルファの前で発情して、無事でいられるとは思わないので、やっぱり僕の勘違いだろうか。

でも、あんなに心臓がうるさくて、息も苦しくて、自分が自分でなくなるような恐ろしい思いをしたんだ。あれが発情期でないのなら、本当の発情期には、もっと恐ろしいことが起こるってこと

でしょ？

首を捻つてみると、胸の上で手を組んで眠っているアスター様が、「ううん」と小さく唸った。

とても行儀のよい寝相だけれど、眉間にはくつきり皺が刻まれている。普段の寝顔は人間とは思えないほど静謐な美しさなだけども、何か夢でも見ているのだろうか。悪い夢を見ているのなら、起こしたほうがいいのかな。

迷っているうちに、アスター様はぼかりと目を開けた。睫毛に縁取られた紫水晶のような瞳が、きらきらと輝いている。

アスター様が腹筋だけで身を起したので、ベッドのスプリングが軋んだ。

「私が気絶だとか？ ありえない！」

見た目だけなら儂く倒れてしまいそうな麗人なのに、豪華な金髪をワシワシと掻き回している。品行方正なアスター様だけれど、僕の前ではその限りでない。

彼はひとしきり「ありえない」と呟いた後、ようやく僕に気づいた。ちよつと頬を染めて恥ずかしそうにしている。美人がふにやふにやすると可愛い。

「リリも倒れた？」

確信めいて尋ねられて、僕は素直に頷いた。

「そうみたいです」

「ふたり揃つて発情期がきた？」

「やっぱり発情期なんでしょうか？」

異口同音——ふたりに首を傾げる。

高熱で寝込んだ後のような重怠さがあるし、身体を動かすのが億劫だ。とりあえずベッドから下りよう。

そう思ったが、全身がミシミシいつている気がする。それでも長槍の使い手で、冬眠明けの熊の駆除に参加したこともあるのに。運動不足とはほど遠いはずが、なんでこんなに全身筋肉痛なんだろう。

ギクシャクと上掛けを剥がしていると、アスター様がぼつりと言った。

「芳醇な葡萄酒の香りだったな……」

本当に小さな独り言だったけれど、僕はそれを聞き逃さなかった。

「柑橘ですよ？」

葡萄酒の香りなんて、微塵もしなかった。けれど、アスター様は僕のほうをまじまじと見て、「柑橘？」なんて不思議そうにしている。

「青みがかった銀髪の、リリより冴えた緑の瞳の……」

「そんな人いました？ 黒髪でコーンフラワーブルーの瞳のアルファならいましたけど……柑橘系のちよつと苦味のある甘い香りがしました。あの人、王子様なのかなあ」

うずくまった僕の手を握った、精悍な顔立ちの男性を思い出す。手のひらがゴツゴツしていた。あれは武器を持って戦う男の手だ。

上背もあつた気がする。ヨルージャ王国とまみえるとき、あの威風堂々とした姿は牽制になるだ

ろう。辺境伯の跡を継ぐアスター様の隣に相応しい。ふたりが並び立つ姿を想像してみると、とても美しい一対に思えた。

相手が僕だったらと想像しかけたところで、アスター様が怪訝な表情で「うーむ」と唸った。それまで考えていたことは、どこかに吹き飛んでしまう。

「そんな男がいたか？ あの距離でコーンフラワーブルーが見えるなんて、リリはどんな視力をしているんだ？」

顎に手を添えて、しきりに首を捻っている。本当に、柑橘の香りのアルファには気づいてないんだ。

あの場にふたりいたのは確かだ。王子殿下と侯爵家の人に来ていたはずだから。でも、アスター様がおっしゃっていた銀髪の人なんて、僕はこれっぽっちも記憶にない。

向かい合つて「むむむ」と唸っていると、奥様からの先触れが来た。侍女が僕らの目覚めを知らせたようだ。

慌ててアスター様のベッドから下りる。もう子どもじゃないんだ、主人のベッドで寝こける従者なんて、ダメに決まっている。

少しふらつきつもちよつとだけ身だしなみを整えていると、すぐに奥様がやってきた。アスター様をそのまま大人の女性にしたような美しい方だ。

「わたくしの可愛い息子たち、無事で何よりだわ」

奥様は僕たちの姿を見るなりおっしゃった。感極まって、涙ぐんでいらつしやる。

ずいぶん大袈裟だと思ったが、聞けば僕たちは三日も寝室に籠っていたらしい。やつぱり発情期だったんだ。それはつまり、オメガとして身体ができあがったということで――

「第四王子殿下と侯爵子息、彼らはあなたたちの運命の番のようです」

奥様はハンカチで目元を拭っている。

運命の番というのは、伝説級の番でめったに出会うことがないと言われている。

奥様の話によると、僕たちは運命の番に出会った衝撃で発情したらしい。まだちゃんとした発情期を迎えていなかったのが幸いして、症状は軽度だったようだ。

王子殿下と侯爵子息は、日常的にオメガのフェロモンを遮断するためのポジションを服用しているらしく、それを追加服用した上で、この三日間は客間で隔離生活を送っているという。

オメガ用のポジションは市販されておらず、本格的な発情期を迎えたら薬師に依頼して調査してもらうのが一般的だ。副作用が酷いため、個人に合わせる必要があるのだ。僕らの分の材料はすでに用意されていたので、奥様お抱えの薬師を呼び出したりと大騒ぎだったようだ。

「こんなときは、医師かオメガの家族が慰めるものだけ……流石にわたくしがオメガと言っても、あなたたちは男の子だし」

「母上が思いとどまってくださって、助かりました」

アスター様がしみじみおっしゃった。

僕も助かった。使用人の中にも数人のオメガがいるが、顔見知りには恥ずかしい姿を見せるなんて冗談じゃない。少し前に従僕を引退したオメガのおじいちゃんはとてもいい人だけど、それとこ

れとは話が別だ。

「わたくしの息子たちに、何もなくてよかったわ」

奥様はさつきから、僕のこと息子とおっしゃっている。やはり、旦那様の言葉を聞き間違えんじゃない。僕は、いつの間にかリリフラウ・ワグナになっていたようだ。

アスター様も、奥様の言葉の裏を正確に掴んで、ほうとため息をついている。

「母上、リリはいつの間に、私の弟になったのです？ 喜ばしいことですが、こういうことは本人の意思確認が必要だと思いませんか？」

僕は必死に頭を上下させて同意した。断るという選択肢はなかっただろうが、教えておいてほしかった。

奥様は、正論を述べるアスター様の眉間に手を伸ばす。「ダメよ」とでも言うように、刻まれた皺を指先で伸ばしながら、女神のような微笑みを浮かべた。

「あら、リリのほうがお兄ちゃんよ」

「こんなに小さくて可愛らしいリリが、私より年上だと？ てつきり年下だと……」

アスター様の動きが止まった。目を見開いて、口を開けては閉じてを繰り返している。

「同じ年です！ 三ヶ月早く生まれただけです！」

衝撃を受けているアスター様を必死にフォローした。生まれは同じ年だが、僕のほうが三ヶ月早いのだ。

アスター様は毎年誕生日のお祝いをしてくださっていたが、僕のほうが生まれ年が遅いと思って

いらしたようだ。

とはいうものの、引き取られたときの僕は、アスター様より頭半分くらい小さかった。それに、記憶が曖昧で、自分の名前くらいしか覚えていなかった。母様の名前は父様が呼ぶ愛称でしかわからなかったし、父様のことなんて母様が呼ぶ「あなた」という名前だと思っていた。けれど、それはあくまで僕の事情であって、大人たちが僕の生まれ年を知らないはずはない。

「それはさておき」

アスター様はご自分が弟になったのは、なかったことにするようだ。「んんっ」と咳払いして、脱線した話の軌道を修正する。

「リリは正式に、ワグナ家の籍に入ったのですね？」

「ええ」

「そして、私たちに運命の番が現れたと」

「そうよ」

アスター様の問いに対する、奥様の答えは端的だ。

運命の番——アルファとオメガには相性がある。わかりやすいのはフェロモンの匂いだ。アルファは特定のオメガの、オメガは特定のアルファのフェロモンの匂いを心地よく感じる。好ましくない匂いが存在する一方、我を失うほど強く惹かれる匂いもあるのだ。

「柑橘の香り」

「甘い葡萄」

僕とアスター様の声が重なった。

奥様は泣いて赤くなった毗^{またり}をこちらに向けて、につこりと微笑んだ。本当にアスター様にそっくりだ。違うな、アスター様が奥様にそっくりなんだ。

「わたくしは残念ながら、王子殿下方にお会いしたことがないのよ。それぞれ柑橘の香りと葡萄の香りを放っておられるのね？」

奥様とそんな話をしていると、ふいに甘い果実の香りが漂ってきた。僕を腑^ふ抜けにする、甘くてキリッとした柑橘の香りだ。

「葡萄の香り……」

アスター様は葡萄の香りしか感じていないようだ。やっぱり、甘くてちょっと苦い柑橘の香りは、僕だけにしかわからないんだ。

「あのスカした垂れ目がむかつく」

柑橘の香りにうっとりしていた僕は、アスター様の苛ついた口調で我に返った。垂れ目って、今それ大事なことから？ 僕も垂れ目なのですよと胸に刺さる。

「香りが近いのね？ 部屋の傍までいらしているのかもしれないわ。あなたたちが目覚めたと、お父様が伝えに行かれたから」

奥様はふうと息をついて、不機嫌そうに眉間をわずかに寄せた。貴婦人だけれど辺境の女だ。お淑^とやかなだけでは、ヨルージャ王国の襲撃に生活を脅かされているこの地には住めない。もちろん、夫である旦那様にも従順ではない。

「息子の嫁入りに浮き足だつて……これだからアルファはダメなのよ」

奥様はアルファをまとめて一刀両断し、控えている侍女に目配せした。

そのとき、ぴったり計ったように、「奥様！ 王子様方が！」と女中が駆け込んできた。作法をどこかに忘れてきたような慌てぶりだ。一応先触れなのだろうが、無作法なことこの上ない。

扉の向こうから侍従たちが制止する声がする。相手が王子殿下だというのに、辺境伯家の使用人は一步も引いていないようだ。

「いずれ婿入りする婚家の使用人を敵に回すなんて、お馬鹿なことはいせんわよね？」

奥様は不敵に笑って、顎をつんと上げた。そのまま腰のホルダーに下げていた扇を抜くと、手袋に包まれた手のひらでパンツと小気味いい音を響かせる。それを広げて顔貌を隠したちょうどそのとき、甘い柑橘の香りが部屋に充満した。

心臓が跳ねる。咄嗟に胸を押さえたが、鼓動が収まるわけもない。

奥様が厳しい声で、「ポジションを！」と女中に命じた。

僕らは差し出された美しい切りガラスの瓶の口を切り、一気に飲み干した。オメガ専用の抑制剤はとてもよく効くが、味は二の次なのかどろりとして甘く、喉に引っかかる。口直しにさっぱりした飲み物が欲しくなった。レモン水とか蜜柑水……って、柑橘の香りがする水では状況が悪化しそうだ。

抑制剤は即効性があるけれど、流石にそんなにすぐ効果があるわけではない。倒れる前の焦燥感にも似た衝動は抑えられているが、動悸^{どうき}は収まってくれない。心臓は勢いよく音を鳴らし続けてい

て、とても息苦しい。

しばらくして、悠然と乗り込んできたのは、銀髪の男だった。僕の隣に立つアスター様の肩がひくんと揺れる。

僕はといえば、わけのわからない残念な気持ちに襲われた。けれどすぐに歓喜が胸に湧き起こる。銀髪の男の後ろから、黒髪の彼が姿を現した。

吸い込まれそうなほど、真つ青な宝石の色をした瞳が、僕だけを見ている。胸がキュツと締め付けられて、思わず押さえた。

アスター様は自分の身体を支えきれなかったのか、へによりと床に膝をついた。僕は助け起こそうと手を伸ばして止まる。アスター様が美しい顔貌を上げて、銀髪の男を真つ直ぐに睨んでいたからだ。

「この私に膝をつかせるとは……おのれ、アルファめ」

アスター様、勝負じゃないんだから。

琥珀色の瞳を潤ませて目尻を真つ赤に染めている時点で、勝敗は見えている。……わけでもなかった。

銀髪の男は、天を仰いで目元を手のひらで覆っている。「マジかよ」なんて悪態をつきながら。なるほど、はたから見ればわかりやすい、アルファとオメガが恋に落ちた瞬間だ。

そうしている間も、僕は漂ってくる柑橘の香りを紛らわそうと、アスター様がおっしゃっていた葡萄の匂いを探す。ううん、さっぱりわからない。

「よそ見しないで」
「ひっ」

突然、耳元で声がした。匂いよりも甘い声にどきりとする。

いつの間にこんなに近くまで来ていたんだ!? 僕だって、アスター様ほどじゃないけど鍛錬はしている。獣の気配だってちゃんと察することができるとに……この人、できる!

「やっぱり、君だ」

至近距離で青い瞳に見つめられて、僕の口からは「あ、あ、あ」って、言葉にならない声しか出ない。

全身が心臓になったみたいだ。ドツドツと耳元まで動悸が聞こえてくる。さっきから息苦しかった胸が、もっと苦しくなった。「この人、できる」なんて、悠長にしている場合じゃなかった!

「抱きしめても?」

耳に直接囁かれる。とてもじゃないが返事なんてできなくて、かちこちに固まった。

彼は返事を待たずに僕を抱きしめた。鍛えられた身体の腕の付け根に、ぴったりとこめかみがつく。

「誂えたみたいだな」

頭ひとつ分高いところから囁かれる。

体格差のことを言っているのかな。直接伝わる体温にのぼせそう。発情抑制剤を飲んでいてよかった。でも、こんなにくっついていたら、せつかく落ち着いた発情がぶり返すかも。それはまず

いので、ひとまず離れたい。

理性ではそう思っているのに、身体は全く言うことを聞かなくて、逞しい身体にうっとりともたれかかった。

「王子様方、わたくしの可愛い息子たちから離れてくださいな」

奥様の凛とした声が響いた。

うわあ、そうだった! ここには奥様だけじゃなく、侍女や女中もいる。

「よもやわたくしの目の前で無体をなさったりなど、なさいませんよね?」

冷たい声で奥様がおっしゃる。扇の陰で目を細めているのが見えるようだ。奥様の周りだけ、気温が下がった気がする。

超絶美人な奥様はアスター様そっくりだが、お化粧した分更にすごみが増す。若々しく、アスター様の姉上だと紹介されたら、誰もが信じるだろう。

オメガはふんわりした雰囲気を持つ者が多いけれど、奥様とアスター様はキリツとした美人だ。この母子はアルファの旦那様を完全に尻に敷いている。

奥様は少しだけ扇をずらし、片方の目だけを見せてお客様たちに向かって微笑んだ。琥珀色の瞳は全く笑っていない。

「我らも抑制剤を使用している。滅多なことにはなるまいよ」

銀髪の方がアスター様から視線を逸らさずに言った。

辺境伯爵夫人である奥様は、身分の高いご夫人だ。たとえば王子殿下でも蔑ろにできない存在な

のに、目も合わせずに話すなんて失礼だ。

そういえば、銀髪の男と黒髪の彼、どちらが王子殿下なんだろう……？

黒髪の男に抱きしめられたままなので、僕はカチコチに固まったまま視線だけを彷徨^{さまよ}わせた。きつと、彼にも心臓の音は伝わっているだろう。

「滅多なことなどあつては困ります。どうぞうちの可愛い息子たちから離れてくださいませ」

「あなたの夫君は、そう言われてあなたの傍から離れますか？」

「ほほほ、夫と初対面の殿方では立場が違いましてよ」

奥様と銀髪の男は、表面上は笑みを浮かべているが、ふたりの間にはぴりりとした空気が漂っている。

ふたりに挟まれているアスター様がけろつとしているのが怖い。……前言撤回。アスター様は熊と対峙しているときみたいな表情で、銀髪さんを睨んでいる。

狐と狼の戦いを見ているようで、僕はボカンと口を開けるばかりだ。冷たい笑顔の戦いをぼうつと眺めていると、背中に戻った腕に力が込められた。

「ウィンダムばかり見ていないで、俺を見て？」

「……ッ」

口から「ぎゃー」とか、「わー」とか出そうになるのを必死で抑える。頑張つて違うことを考えているのに、僕の不整脈の原因と思いきアルファが甘ったるい声で囁いたからだ。

「えと、あの、あちらの方がウィンダム……様？」

どうやらウィンダムというのが、銀髪の男の名前らしい。

別に彼ばかり見ているわけではない。というか僕は、僕を抱きしめている人の名前すら知らない。見上げると、青い瞳が優しく見下ろしていて、ドキドキは収まらないものの、謎の安心感というか、包容力のようなものを感じた。なんて言ったらいいんだろう、全てが許されているような感覚だ。

「……あなたのお名前は？」

ぼろりとかぼれた言葉に、特別な意味なんてない。

「まいったな。自己紹介もしていないなんて、君に夢中になりすぎだな。リドリーと呼んでください」

「僕は、リリフラウです。あの、その、ワグナ辺境伯の、し、し、子息、です？」

養子になったのだから間違いいはない。アスター様から提案された入れ替わりの件も宙ぶらりんになったままで、どうしていいのかわからなくなっていたので、語尾に疑問符がついてしまった。しどろもどろな僕の自己紹介を緊張のためと思ったのか、リドリー様は柔らかく微笑んでいる。不意打ちに、額にチュツと音がした。

「ちゅ……？」

なんだっけ、よく聞く音だ。そう、アスター様が僕を腕に閉じ込めて額にキスをするときとか……？

「キス……？」

頭が真っ白になったのは一瞬のことだった。僕は、すぐに顔を両手で押さえた。

リドリー様の腕がちりと背中に回っているので抜け出せず、少しでも距離を取ろうと勢よく後ろに反り返る。支えがなかったら、仰向けに倒れて後頭部を強打するくらいに勢いをつけたのに、リドリー様は揺るぎもなかった。

「逃げないで、リリフラウ」

甘やかな声で言われて頭に血が上る。湯気が出ているかもしれない。

もうダメだと思ったとき、乱暴に後ろに引つ張られ、リドリー様の腕から身体が抜けた。背中に薄い胸の感触がして振り向くと、アスター様だった。

「リリに何をするのですか！ まだ挨拶もろくに交わしていませんか！」

細い腕が背後から僕を抱きしめる。見慣れた寝巻きの袖は柔らかい……つて、寝巻き!?

「うわぁ！ アスターさ……ッ、アスター！」

危ない、敬称をつけるところだった。グツと堪えたことでちよつとだけ冷静になった。

「あの、その、僕ら寝巻きです」

王子殿下と侯爵継嗣をお迎えする格好ではない。アスター様にもたれたまま、できるだけひっそりと告げたのに。

「あちらが押しかけてきたのだ。我らは悪くない。それに、見られて困るような身体の鍛え方ではない」

大きな声で返されて、ずっこける。問題はそこじゃない。そりゃ僕だって、筋肉が付きにくい体

質ながらも頑張っている。だけど、今は体つきではなく、お行儀の話をしているんだってば。

背後からヒュウと尻上がりの口笛が聞こえた。王子様にしては行儀が悪いな。銀髪の男——ウィンダム様が、「ふうん、鍛えているんだ」なんて言っているのは聞こえないふりをする。

「アスター……さ、さ、アスター、そうじゃなくてすね」

僕が訂正しようとした声を遮ったのは奥様だ。

「さあ、王子様方、これ以上息子たちに恥をかかせないでくださいませ」

僕とアスター様を背に庇うように、リドリー様の前に立ち塞がる。奥様はオメガの女性だが、流石辺境伯夫人だ、迫力がある。

リドリー様は奥様に礼をして、一步下がった。

「未来の義母上を怒らせるのは得策ではありませんね」

奥様が「王子様方」と呼びかけて、リドリー様が返答なさったということは、王子殿下はリドリー様なんだ……

「アスター、さ、ま」

今度は本当に小さい声で呼んだので、僕を抱きしめるアスター様にしか聞こえないはずだ。

「リリ？」

僕の身体の震えが伝わったのか、今度はアスター様も小さな声だ。

「ねえ、どうしよう。リドリー様が王子殿下だったら、アスター様の婿君だよ」

「あ」